

レーザーコンパス

最近の日本語について

赤崎 正 則*

Masanori AKAZAKI*

日本語の文章（漢字仮名まじり文）は、漢字の表現力と仮名による区切りで読み易い密度の高い文章を構成している。このことは日本語のローマ字文章と比較してみるとよくわかる。ローマ字やエスペラントが普及しなかったことと無関係ではないであろう。

またラジオやテレビのように外来語を発音に近い片仮名で表現できることも、日本語の柔軟性を示している。しかしこの場合は仮名の表示を誤ると後での訂正に苦勞する。米国大統領の名前をリーガンからレーガンに変更したときの混乱で経験済みである。ラジオはもうレイディオにはならないのである。

同じ漢字国であった中国では、すべての外来語を漢字（簡体字）に直していると聞いている。テレビ受像機は電（電）視機で、電話は電活である。日本でも戦前はテレホンを電話、シネマは活動写真から映画というふうを意識して漢字を当てていたが、現在は片仮名で書くことによって、文章の中にあっても漢字同様に扱えるから問題はないようにみえる。これらの外来語も長い間の使用によって完全に日本語化したものは平仮名に昇格（？）している。たばこはその例である。しかしこれもタバコの方が文章の中では区切りが明らかになるからよいように思う。また片仮名表現も字数が多くなると、必ずしも漢字同様とはいえない。コミュニケーションやシミュレーション位が限界であろう。

外来語の表記に関しては、国語審議会報告（昭和29年3月）や文部省注記（昭和30年3月）によって一応の原則が示されているが、学術用語として必ずしも統一されていない。その結果、レーザとレーザーやエネルギーとエネルギーが混用されているのは残念である。上記の原則では、英語で-er, -or, -ar等は片仮名に表記するときは最後に一をつけるとしているが、慣例によって一をつけないものはその限りでない、あいまいにしている。このことが根拠になっているかどうか明らかでないが、学会によっては、-er, -or, -arには一をつけないが、子音で終子gyやpyには一をつけることにして前者は例えばレーザ、レーダとし、後者ではエネルギー、エントロピーとしている。これに対して逆にエネルギーやエントロピと表記している学会もある。

平素、用語や文章に極めて厳しい学会が、横の連絡なしにそれぞれ異った基準で外来語の片仮名表記を決めてしまった結果である。先日、ある人の業績書を見て、レーザとレーザーが交互に出てきて驚いたことがある。論文発表誌の所属学会の方針に従った結果である。最近わが国の学術水準の向上に伴って邦文論文誌の海外での評価が高まっており、海外での日本語熟の上昇と相まって、日本語の論文が直接海外で読まれる機会も多くなっている。単語の最後の一で意味の取り違いがおこる心配はないとしても

* 九州大学総合理工学研究科エネルギー変換工学専攻（〒816 春日市春日公園6-1）

* Department of Energy Conversion Engineering, Graduate School of Engineering Sciences, Kyushu University (6-1, Kasugakoen, Kasuga, 816)

ミスプリントではないか位の指摘はされるであろう。勿論一の有無よりも、例えばVの表記が問題であるという見方もある。しかし発音を正しく片仮名表示することは殆んど不可能なことであるから、ほぼ近い表記で統一することの方が重要である。

また最近では、外来語の略語がローマ字のまま書かれることが多い。横書き文章の中だけでなく、縦書きの新聞等にもDNAやINSなどのローマ字が見られる。最初のうちは括弧付きで日本語訳がついているが、前後の文章から判断できる場合には説明なしで書かれることが多い。LAN、VANやIC等が縦書き文の中に説明なしで出てくるとなると、これらのローマ字は片仮名と同格になったことになる。しかし超LSIとかDNA塩基で1つの術語になると漢字扱いである。レーザーやエネルギーは、今日では完全に日本語化していてLASERやEN

ERGYになることはないであろう。ましてや“たばこ”の例にならって“れーぎー”とか“えねるぎー”にはしてほしくないものである。一方、LANやVANは長く使われて日本語化してもランとかバンになることはないであろう。それは短かすぎて、内容が判りにくく、かつ他と混同し易いからである。片仮名の場合も、ローマ字の場合も適当な長さがあるに自然に落ち着くものと思われる。

最近の日本語をみていると、漢字、平仮名、片仮名、更にローマ字の4種類の表記が混合されていて雑然としているようにも思われる。我々日本人には奇異に思われないことも、外国人には理解し難いことかも知れない。日本人の国民性では、これらのものを容認し、同化してゆく習性があり、宗教における神仏習合と相通ずるところがあるように思われる。